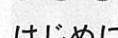


第49回企画展

「100年前の世界が見える、日本が見える ～六所家旧蔵絵葉書コレクション～」より

井上 卓哉（当館学芸員）



はじめに

平成18年6月、富士市今泉八丁目に位置する旧家・六所家より4万点をこえる資料群が富士市へと寄贈されました。六所家は、明治政府の神仏分離政策により還俗するまでは富士山東泉院という寺院を営んできました。還俗後には六所姓を名乗り、近年までこの地域の有力者として活動することとなります。

六所家旧蔵の資料群は、江戸時代以前の富士山東泉院にかかるものと、明治時代以降の六所家にかかるものとに分けることができますが、いずれも地域の歴史や文化を解明する多くの材料を秘めた資料群であるといえます。

富士市立博物館では、これらの資料を活用するため、平成18年度には基礎整理委員会、そして平成19年度からは総合調査委員会を組織し、現在にいたるまで膨大な資料の整理、調査研究を実施してきました。その結果、当初の予想を超える多彩な内容をもった資料が含まれていることが明らかとなっていました。



絵葉書の歴史

六所家旧蔵の資料群の一つに、5,299枚にものぼる絵葉書があります。

一説では、1870年、第二帝政期のフランスと、ドイツ諸邦と同盟を結んだプロイセン王国の間に戦争（普仏戦争）が勃発した際、ドイツの宮廷御用書務店兼印刷業者のA. シュワルツが官製葉書に戦争の様子を印刷したものが世界で初めて製作された絵葉書とされています。

それから遅れること30年、日本においては、明治33年（1900）10月の郵便法の改定により、私製葉書の発行が許可され、国内における絵葉書の発行が盛んとなりました。そして、当時の通信省が、明治37～38

年（1904～1905）の日露戦争中に、戦争にかかわる画像を掲載した絵葉書を多数発行したことが、国内における絵葉書ブームのきっかけとなりました。

当時の熱狂的なブームの例として、多くの書籍において、明治39年（1906）4月に発行された「明治三十七八年戦役陸軍凱旋觀兵式記念」にまつわる事件が紹介されています。これによると、東京のある郵便局では夜明け前からこの絵葉書の購入希望の人々の群集で警官隊が出動する騒ぎとなり、その際に余りの人の多さのために二人の少年が窒息死したといいます。

なぜ、当時の人々がここまで絵葉書に熱狂したのでしょうか。というのも、当時の人々にとって主要な情報獲得手段であった新聞においても、戦争や事件、災害の現場写真はほとんど掲載されていませんでした。また、画像で情報を手に入れるためには、発行まで時間のかかる浮世絵や錦絵などの版画などに頼らざるを得なかったのです。



東郷大将歓迎当日市内ノ光景

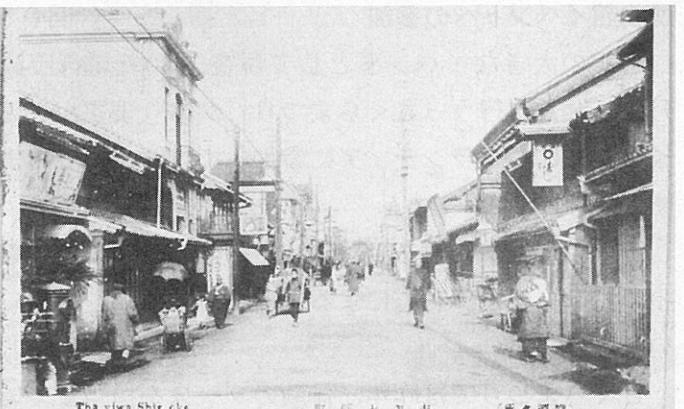
明治42年1月1日の消印あり・日露戦争の英雄として国民の尊敬を集めた東郷平八郎の凱旋の様子を紹介したもの

つまり、絵葉書は画像情報と速度を備えたニュース媒体として当時の人々に受け入れられたと考えることができます。もちろん、その背景には写真技術と印刷技術の発展があったということも忘れてはなりません。

このようにして多くの人々の間に広まった絵葉書ですが、大正時代末期には、新聞に掲載される写真の増加、週刊誌の刊行、ニュース映画の普及といった、画像の伝達手段が多様化していきます。その結果、絵葉書に求められたニュース媒体としての価値は低下する

こととなります。浦川和也氏によると、大正9年（1923）9月の関東大震災を最後に、戦争や災害、事件を迅速に伝えることを目的とした絵葉書はほとんど発行されなくなるといいます。

その一方で、観光地や名勝の様子を掲載した「名所絵葉書」や、様々な記念行事を掲載した「記念絵葉書」、企業のさまざまなPRを目的とした「企業・広告絵葉書」、天皇・皇族関係の画像を掲載した「皇室絵葉書」、女性や子供などの画像を掲載した「プロマイド絵葉書」、様々なイラストやデザイン、美術品などを掲載した「アート絵葉書」など、多種多様な事項を題材とした絵葉書が発行され、多くの人々の間に流通することとなります。



(静岡名所) 市内七軒町

明治40年から大正7年の間に発行されたもの

六所家旧蔵の絵葉書

六所家から寄贈された絵葉書は明治時代後期から昭和初期にかけて発行されたものが中心であり、その種類は多種多様です。特に、各地の風景や建築物、史跡などを被写体とした絵葉書が数多く含まれていますが、日本各地のものだけではなく、海外で製作・発行されたものも多数にのぼります。

そして、これらの絵葉書は六所家の代々の当主や家族が買い求めたものと、六所家の人々へと送られてきたものとに分けることができます。そこからは、当時は絵葉書を集め、通信手段の一つとしてそれを送るということが日常的に行われていたことがわかります。

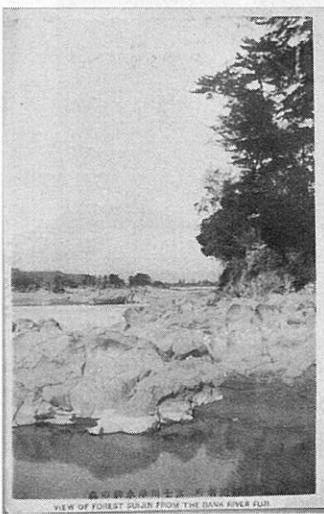
それとともに、絵葉書が製作された当初の、ニュース媒体としての価値は低下したものの、現在の私達が

テレビや新聞、インターネットといったメディアをつかって色々な画像や情報を手に入れるのと同じように、当時の人々にとって、絵葉書は画像や情報を伝える貴重な手段の一つであったことがわかります。

一方、私達は現在の情報や画像は簡単に手に入ることができますですが、過去の情報や画像を手に入る手段は限られています。たとえば、過去の情報を手に入れる手段として写真がありますが、撮影日や撮影場所、そこに写された人々の情報が書き込まれることはあまりありません。そのため、写真が古くなればなるほどそこから得られる情報は限られてしまいます。

それに対して、絵葉書にはタイトルがつけられていることが多いほか、通信欄の体裁からある程度の発行年代を推定することができます。また、消印が押されている絵葉書からはその使用年代が明らかとなります。つまり、絵葉書は写真と比べて格段に豊富な情報を持っている資料であり、現在の私達にとって、六所家旧蔵の絵葉書は、当時の画像や情報を知るための貴重な手段の一つであるといえます。

明治時代後期から大正時代の絵葉書を中心にご紹介する今回の展示を通じて、当時の人々が見た日本の様子、そして世界の様子を現代に伝える機会となれば幸いです。



富士川岸水神の森

大正2年の消印あり



Berlin Die Friedrichstrasse

1925年の消印あり・ドイツ、ベルリンのフリードリッヒ通りの様子

浦川和也（2008）「近代日本人の東アジア・南洋諸島への「まなざし」」『国立歴史民俗博物館研究報告』第140集、p117-166